

國民學校への入學に就て

倉 橋 惣 三

「いよく國民學校ですな。お目出度うございませうが、初めてですの
で、どういふ風にやつたらよろしいも
のか、頓と分りませぬので。昨日も、國民
學校へ上つたら、しつかりおしよといつて
やりましたが」

「ありがたうございませう。お蔭さまで幼稚
園も無事に修了させていたゞきます。
國民學校も無事に終らせたいものでござ
います。」

「おや、もう卒業のことを考へてゐら
しやるのですか。親の心は先きを先きを
と樂しんでゐるといつた人がありますが、
流石に感心しました。」

「あら、あんなことをおつしやいまして、
さういふ譯でもございませぬが。」

「いえ、じようだんですよ。しかし、卒業
も大事ですが、入學の初めも大事ですな。
たしが初めての御入學でしたね。」

「さうなんでございませぬ。お幾人も入學
をおさせなさいました親御さんには何んで
「さようなんでございませぬ。お幾人も入學
御覺悟は……」

「分ると言ひますと……」

「國民學校入學の、なんと申しませうか、
覺悟がとでも申しませうか」

「覺悟でもいゝですがね。お母さまの方の
御覺悟は……」

子どもの質問

一 愛 讀 者

「日蝕つてなかに？」「日蝕つてどうい
ふの？」先日の「世紀の日蝕」の頃、こんな
質問を子ども達から受けられたお母様方
がきつと澤山おありでせう。何とお答へ
になりましたかしら。私もその質問をさ
れた母親の一人です。

或人は子どもに質問に、大人がありき
たりの理窟をおしつたり、大人の觀
念的な、知つた振りの即答やらをしない
で「さあね」と考へさせる事が何よりだ
と申されます。「考へてごらんはともか
くも、さあ、知らないよそん事」むつ
かしいからね、お母さんにはわからない
よ」「先生にきいてごらん」では子どもの
欲求を満足させないばかりか、折角知ら
うとする心、所謂科學する心の芽を害ね
てしまひさうです。どうしてなの。「なぜ
かうなるの」ときかれる毎にこれはかう、

「わが子を初めて國民學校に入れる母の覺悟ですね」

「はっ」

「お子さんにはまだ之れからのことで、國民學校がどういふところが分りません。それで覺悟のしやうもないかも知れません。しかし、お母さまは、それでは濟みますまい。わが子の進む國民學校といふところに就て、豫めよく知つてゐなくてはなりませんね。その上で覺悟を……」

「なかに、子どもの方へは少々可笑しい言葉だつたり、無理なことでもありますが、母の方には、實際覺悟が在るのですよ」

「世間には、わが子を學校へつれて行つて、先生に渡せばよいと思つてゐる人がありますね。あれでは親がついてゐるわが子の入學ではありませんね。わが子のほんたうの入學は、親の入學でもあるのですからね」

「はあ」

「親も入學するといふと變ですが、國民學

校のことをよく研究して置くことでですね。わけても、國民學校一年生の教育がどういふ風に行はれるものかといふことをね。」

「自分の時のことは古いことで」

「古いころではない、小學校でせう。殊に低學年の様子は、あなたのいらつした時とは、まるで變つてゐますよ」

「よく教へていたらきたうございます」

「さう簡單にはいきませんがね。先づ國民學校令をよく讀んでお置きになることでですね。それと同時に、國民學校の教科書をね」

「はあ」

「國民學校令を讀むと、國民學校の教育の方針や性質がよく分ります。母もそれがつてゐないと、わが子の導きは出来ませんね。それから、教科書を御覽になると、今日の國民學校低學年のことが凡そながら分りませう、折角の教科書を子どもに與へて、自分はそのいも見ない親がありますからね。それでは覺悟もつきませんね。」

「あらまた。でもよく分りました。とにかく早く拜見しまして、またお話を伺はせて頂きます。」

「三月の親の仕事ですね。」

あれはあゝと答へてしまふのはむしろ、わたくしも知れませんが、答へに困れば、いまいにわかる」「本にさう書いてある」と言へませうから。でもそれではどうかと思ひます。その質問によつて違ひますが、いつも母親もともに考へる態度をとり、わかり切つた事でも一應「なぜかしら」と「こちらも疑問にし」「かうぢやないかしら」といふ風にもつてゆく。少しでも考へる餘地を子どもに與へてこちらからも「ぢやかうなつたら」と更に一歩前へ疑問を進めてゆく事もあつていゝと思ひます。そしてその時せひ解決してしまはうとしないで疑問を残しておく事もあつていゝのでせう。心身忙しい母親にはこれだけの事も思ふにまかせませんが。